慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	擬洋風建築としての演説館について
Sub Title	On the "Enzetu-Kan" as a typical architectural style of "Gi-Youfuー Kentiku"
Author	内田, 青蔵(Uchida, Seizo)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2016
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.33, (2016.) ,p.406(27)- 432(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集 : 演説館開館一四〇年第二部
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20160000-0406

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第三十三巻（二〇一六年）
小特集　演説館開館一四〇年 第二部

擬洋風建築としての演説館について

内　田　青　蔵

1　はじめに

慶応義塾三田演説館（以下、「演説館」と記す）は、昭和 42（1967）年に国の重要文化財に指定され、現在に至っている（図 1）。これからもわかるように演説館は、近代日本建築史の世界では「擬洋風建築」の貴重な遺構として知られている。ただ、例えば、擬洋風建築そのものを対象とした近藤豊の昭和 36（1961）年にまとめられ、1999 年に発行された『明治初期の擬洋風建築の研究』（理工学社）では、演説館は擬洋風建築の特徴的壁面仕上げとしての海鼠壁の事例として紹介されているだけである。また、近年、刊行された『擬洋風建築　第 446 号』（清水重敦　日本の美術 7　至文堂　2003 年）でも、演説館に関しては、写真を裏表紙に用いているのみで、本文での解説は見られない。

このように演説館は、海鼠壁を用いた明治初期の擬洋風建築の貴重な遺構とされつつも、具体的な紹介はほとんどなされていないのが実情である。その理由は、おそらく演説館の設計者はもちろんのこと大工名などの建物に関する文献資料がないことや建築の棟札などの存在を含め建築そのものの調査もほとんど行われていないため、その特徴や建築経緯などを詳細に語ろうにもその情報がないことによるものと推察されるのである。その意味で、堀内正昭の「三田演説館の建築史を紐解く」（慶応義塾福沢研究センター『近代日本研究』NO.32　2016 年）と題する実測調査をもとにした演説館の現状調査の報告は貴重である。ただ、その内容は、演説館の創建時の姿の解明に終始し、建物の様式的分析や建築史上の位置づけはな

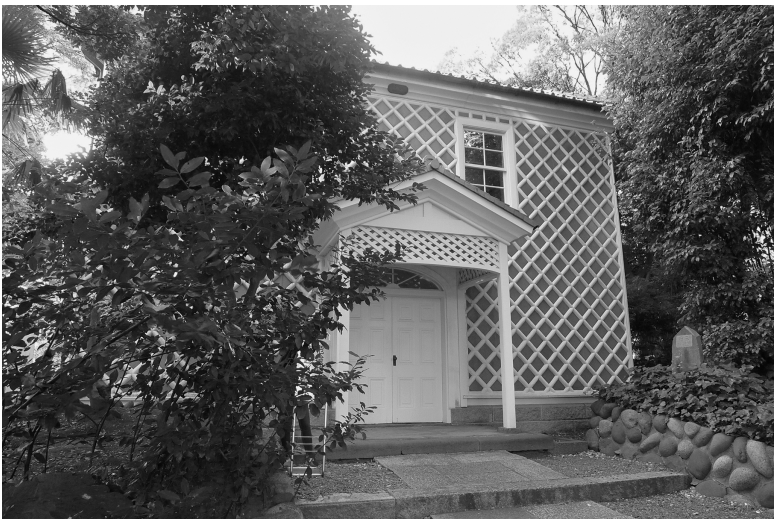

図１　演説館外観写真（内田撮影）

されていない。

そこで、本稿では、これまでの既往研究を下敷きに、改めて、擬洋風建築としての演説館について再考してみたい。

2 「擬洋風建築」の用語とその評価について

「擬洋風」という言葉は、「洋風のような」という意味であり、一見すると否定的な印象を与える名称といえる。この「擬洋風」という言葉を最初に使用したのは、堀越三郎で、昭和 5（1930）年に明治前期の建築を、外国人建築家による「純西洋建築」、日本人大工による「擬洋風建築」、日本人建築家による「日本式西洋建築」という分類の中で初めて使用し、以後、普及したといわれている[1)]。そこでの使用は、あくまでも様式的分類上に日本人大工の手になる建築を「擬洋風建築」と称したのであった。ちなみに、この堀越三郎は、「擬洋風建築」の名称を使用する前年に、明治初期のわが国の近代化の過程を示す建築が失われていく現状を危惧し、建築史的観点からも明治初期の建築について史料をもとに克明に紹介すべき

であるとし、『明治初期の洋風建築』（丸善株式会社　1929 年）として刊行している。このため明確には記されていないものの、堀越が日本人大工の手で建てられた明治初期の建築の価値を認めていたことは十分推察できる。そのため、擬洋風建築という名称は否定的な意味を持つものではなく、あくまでも分類上に使用された名称であったと推察できるのである。

次に、戦後の状況を見てみる。戦後にいち早く擬洋風建築について研究を進めていたのは近藤豊で、昭和 36（1961）年に擬洋風建築の研究をまとめている。近藤豊が指摘している「擬洋風建築」の特徴は以下の通りである。

> 外国人ならびにその下で働いていた日本人によって洋風建築は数を増していったのであるが、同じ洋風建築とはいっても外国人の設計・監理になるほとんど純洋風建築と、日本人が見習った知識・技量で模倣した建築との間には格段の差が認められる。後者はいわゆる擬洋風建築であって、材料・技法・表現などが日本的要素に富んだものとなった。
>
> 純洋風に近い建築の場合はもちろんであるが、擬洋風の場合でも最初は外国人の描いた図面を示され、説明を聞いて工事を進めたのであった。本来なら純洋風で出現させたい建築も、設計者や指導外国人の不足、日本人の洋風理解の不足および材料と経済的な不足、それに加えて需要が盛んであるからいきおい和製の洋風すなわち擬洋風とならざるを得ず、それは日本に西洋風建築が行われるごく最初からはじまった運命でもあった。……中略……
>
> いっぽう、開港後の横浜においても居留地には外国人用住宅・商館・領事館などが続々建てられ、文久元年（1861）には「外人家屋定式請負人兼入札引受人」として清水屋喜助・宝田屋太郎衛門・水島屋竹村武助・深見屋河井松右衛門の 4 名が指定されていたし、林忠恕も慶応元年（1865）に横浜へきて英国人ドールや米国人ビールジンスについて実地から叩き上げたという。
>
> これ等の工匠によって、洋風建築はいっそう深く理解されていった。なかでも 2 代清水喜助は民間で、林忠恕は後に官庁に入ってそれぞれ活躍し、明治初期の擬洋風様式の定型化に大きい功績を残している。

（『明治初期の擬洋風建築の研究』pp. 241-242　理工学社　1999 年）

これによれば、擬洋風建築は、外国人のもとで洋風建築の仕事に携わった日本の棟梁たちが、その経験をもとに在来の技術手法を用いて完成させた建築ということになる。そうした建築は、「和製の洋風」で、外国人技師の不足、日本人の洋風の理解不足、材料と経済力の不足という状況の中で出現したもので、結果的には、「材料・技法・表現などが日本的要素に富んだもの」となったという。言い換えれば、西洋建築の知識や材料などがあれば、本来、生まれることはなかった建築であり、洋風建築ながらも伝統色の強い建築であるということになる。

このように「擬洋風建築」の誕生の時代背景や担い手、あるいは、建築デザインの特徴は明記されつつも、その評価に関しては明確にはなされていない。「設計者や指導外国人の不足、日本人の洋風理解の不足および材料と経済的な不足」といった記述からすれば、やや否定的な評価という印象も受けるが、それでも、先の堀越三郎同様に研究対象としていることを考えれば、それなりの価値を認めていたものと推察できる。

一方、近藤の研究から後の昭和 51（1976）年に記された日本建築学会編の『近代建築史図集　改訂版』（彰国社）では、擬洋風建築について、以下のように解説している。

> 民間の棟梁を中心とする建築関係の工匠たちが、西洋建築の様式、意匠に強い関心を抱いて見よう見まねで設計、施工した建築は、技法は日本伝統のものを応用し、意匠は西洋と、混在するものがあった。しかも意匠の中にも日本的なデザインを加えて主張するところもある。擬洋風建築とよばれるゆえんである。
>
> その泥くささ、その不思議なバイタリティをもって明治の建築を彩ったが、一般的には明治の 20 年代をもって影をひそめる。
>
> （『近代建築史図集　改訂版』p. 96）

これによれば、その特徴は近藤の指摘と同様ながらも、擬洋風建築の存在時期を明治 20（1887）年頃までと明確にするとともに、「不思議なバイタリティをもって明治の建築を彩った」とその存在をはっきりと評価していることがわかる。

次に、最近の解釈として、先に挙げた清水重敦は、自書のなかでより具体的に擬洋風建築の特徴とその価値を述べている。

> 幕末から明治初期にかけて、洋風とも和風ともつかない、ある種の熱を帯びたような建築群が日本各地に現れた……中略……
>
> これらの建築は、「擬洋風建築」と呼ばれている。擬洋風建築は、主に近世以来の技術を身につけた大工棟梁によって設計、施工された建築である。西洋建築に由来する形を持ちながら、その細部やプロポーションは自在な変形を受け、そして洋風、和風、時には中国風の要素が混合されている。それらは一瞬のきらめきを放った後、明治二十年代には本格的な様式をまとった西洋建築に取って代わられ、建てられなくなっていく……中略……
>
> 擬洋風建築は、幕末明治という時代に日本に西洋建築がやってくることによって生まれた、特異な形式を持つ建築である……中略……新しいものの導入は、選択と再構成、あるいは継承や置換といった複雑な様相を見せる。この摩擦から生じる種々のエネルギーが形をなしたもの、それが擬洋風建築と呼ばれる一群の、際だった魅力を持つ建築群である。（『擬洋風建築　第446号』pp. 17-19）

ここでは、「際だった魅力を持つ建築群」と擬洋風建築をはっきりと評価している。すなわち、近藤豊の擬洋風建築を西洋建築の知識や材料の不足から生まれたものとする考え方は同じであっても、清水重敦の解釈は新しい建築の導入時に生じる摩擦から生まれた必然的建築であり、導入時の摩擦を解消するために積極的に取り組んだが故の独特の魅力があるとしているのである。

以上から、改めて擬洋風建築の特徴を整理すれば、以下のようになるであろう。

時　期：幕末から明治初期に生まれた建築で、明治20（1887）年頃には消えていく

担い手：外国人の手になる図面をもとに日本人大工だけで完成させた建物、あるいは、設計施工共に日本人大工だけで完成させた建築

意匠的特徴：在来技術（材料・技法・表現など）を応用して作り上げた和洋中の技術・材料・意匠の混在した建築
評　価：大工たちが新しい時代の様式に対応しようとした独特のバイタリティを感じさせる魅力的な建築

ここにみられる特徴こそ、今日の近代日本建築史における擬洋風建築の解釈を示すものといえ、その位置づけは益々高いものとなってきたのである。その意味で、演説館の建築史上の価値も、単に明治初期の建築遺構というよりも、明治初期の魅力的な擬洋風建築の遺構として高く評価されるべき建築のひとつといえるのである。

3　演説館の建設経緯とこれまでの評価

3-1　演説館の建設経緯とその建築概要

文化庁の『国宝・重要文化財建造物目録』（平成 11 年）によれば、演説館は「木造、建築面積 191.2 平方メートル、二階建、桟瓦葺」、竣工年として「明治 8［三田演説日記］（大正 13 移築）」とあり、木造 2 階建て・桟瓦葺きの寄棟屋根で、竣工が明治 8（1875）年で、大正 13（1924）年に移築されていることがわかる。

さて、演説館の建設経緯に関しては、福沢諭吉が以下のように述べている。

> 此新法を弘めんとするには特に演説の会堂を作ること必要なりと決して、直に新築に着手したり。此時余が手元には著訳書を発売して聊か貯蓄もあり、新築の図案は偶ま在米国富田鉄之助氏より寄贈せられたる諸種会堂の図本を本にして之を取捨し、凡そ二千何百円を費して匆々竣工したるものは慶應義塾の演説館にして……
>
> （『福沢諭吉全集』第 1 巻　p. 59　岩波書店　昭和 33 年）

これによれば、演説を広めるためには、それにふさわしい施設が必要であるとし、自らが資金を出し、アメリカ在住の富田鉄之助に諸種会堂に関する資料を依頼し、その送られてきた「諸種会堂の図本」をもとに福沢が

自ら考え、演説館を建設したことになる。ちなみにこの富田鉄之助は、明治6（1873）年2月にはニューヨークの副領事[2]に任命されており、福沢が演説館建設のための資料を依頼し、取り寄せたものと思われる。このとから、演説館の設計は建築家の手を経ずに、福沢を中心に大工とともに行われたものと推察されるのである。

また、その完成した演説館に関しては、開館式における小幡篤次郎の祝辞の中で、以下のように触れられている。

> 福沢諭吉君演説講習ノ業ヲ進ルニ汲々タルヨリ、一宇ノ堂舎ヲ築キ明治八年五月一日ヲ撰ミ正ニ此堂ヲ開カントス。其結構ノ細目ヲ掲クレハ木室、瓦屋、間口五間入リ十間、四壁ハ世ニ云フ海鼠壁ノ造ナリ。其内ニ入レハ中央快豁、前面ニ半円形ノ高坐ヲ設ケ講師演習ノ場ト為シ、下段ニ七人ヲ坐スベキ長椅子ヲ二行十五列ニ置テ社員ノ居所トナス。又、室ノ両側ニ高棚ヲ架テ社外聴衆ノ席ト定ム。
>
> （『三田演説会資料』 p . 79）

構造は木造を意味すると考えられる「木室」、屋根は瓦葺きを意味する「瓦屋」、また、建物規模として「間口五間入リ十間」とし、外壁は4面ともに「海鼠壁」で、内部は半円形の演台を意味すると考えられる「高座」とギャラリーを指すと考えられる「高棚」が配されていることが記されており、内外ともに現状と基本的には変わらない[3]。

なお、建物規模に関しては「間口五間入リ十間」と明確に述べられている。堀内正昭は、この記述をもとに建物の規模を間口5間・奥行10間とし、「現在の演説館の間口は9,430㎜なので、1間当たりは1,886㎜（1尺は約314㎜）となる。1間1,818㎜の基準値からすると、演説館の1間の取り方は長い」[4]とし、1間の実測寸法が基準値より長いことを指摘している（図2）。

そこで、この1間1,886㎜という数値の意味することを少し考えてみたい。この演説館の建てられた明治初期は、まだ全国的な度量衡の明確な統一はなされておらず、各地によって1間の基準とする長さが異なっていたり、また、畳割りといった床に敷く畳の寸法をもとに建物の設計を行うシステムも存在していた。しかもその畳の大きさも、地方によって異なる場合があったのである。この堀内の指摘する1間1,886㎜は、1尺303mと

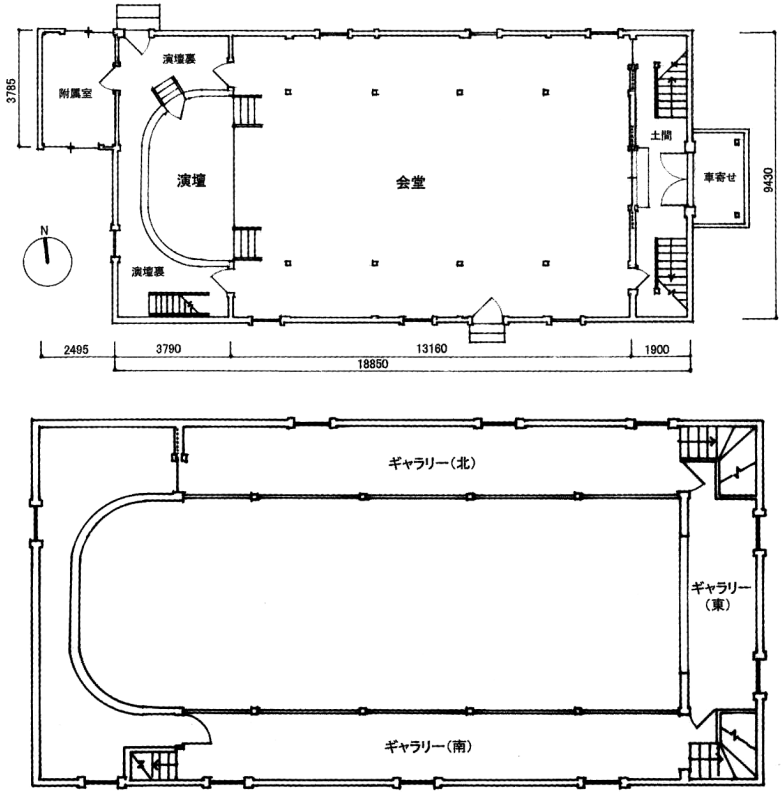

図２　演説館平面図（「三田演説館の建築史を紐解く」（慶応義塾福沢研究センター『近代日本研究』NO.32　2016 年）より転載）

すれば、約 6 尺 2 寸となる。ちなみに、伝統的な畳の寸法には、代表的な畳として 6 尺 3 寸×3 尺 1 寸 5 分の京間畳、5 尺 8 寸×2 尺 9 寸の江戸間の畳とともに、名古屋地方で使われる 6 尺×3 尺の中京間の畳の存在が知られている。そして、江戸間が柱間の 1 間を 6 尺とするのに対し、1 間 6 尺 2 寸を中京間と呼ぶこともある[5]。このことから、この演説館の 1 間 6 尺 2 寸という長さは、設計基準寸法として中京間が用いられていたという可能性を示すものでもあり、また、このことは建築工事を請け負った大工が、1 間 6 尺 2 寸という中京間の寸法を常用していた名古屋地方周辺の出

の大工であった可能性を示すといえるであろう。いずれにせよ、演説館の寸法は、演説館が伝統的な尺寸を用いる大工の手になるものであることを意味しているのである。

さて、改めて小幡の指摘した演説館の記述とともに、目視による演説館の擬洋風建築の特徴としての和洋の要素をピックアップして整理すると以下のようになる。ガラスなどの輸入材が創建時当初から用いられていたかどうかは断定できないが、ここでは取り上げておく。

和風の要素：全体の形状が土蔵風、桟瓦葺き寄棟屋根と鬼瓦、和小屋、海鼠壁、
洋風の要素：ポーチ、ポーチのスパンドレル、玄関扉上のアーチ状のガラス入り欄間、上げ下げのガラス窓、軒の換気口、ドア、演台、ギャラリー

これによれば、建物の本体は、伝統的な2階建ての土蔵造を原型に、内部にギャラリーと演台、外部の開口部に洋風要素を加味したものといえるであろう。また、演説館の全体の構成は、正面は玄関ポーチを中央に配し、両側に上げ下げ窓を配置するという左右対称を採っており、洋風色の強いものといえる。ただ、塔屋といった外観に変化をもたらすデザイン要素は見られず、全体的におとなしい構成といえる。

なお、竣工当時の評判としては、開館式の行われた4日後の明治8（1875）年5月4日付けの『郵便報知新聞』の「府下雑報欄」に以下のように紹介されている。

> 此度大ひに私財を擲ち一宇の厦家を造営し三田演説館なるものを興せり。建築の美は勿論其結構簡厳にして且清潔実に目覚しきありさまなり。

これによれば、建築物はまさに美しく、清潔感の漂う威厳性を持ち合わせたものと紹介されていることがわかる。具体的な特徴などの評価はないものの、高い評価といえる。福沢の教え子たちが入社していた『郵便報知新聞』の記事であることを差し引いても、それなりに評価されていた建物であったと思われる[6]。いずれにせよ、演説館は、明治8（1875）年4月竣工という時期、伝統的寸法と在来工法の使用、和洋の要素の混在、とい

うことを考えれば、まさしく、わが国の現存する最も古い擬洋風建築のひとつであることは間違いないのである。

3-2　演説館のこれまでの評価から見る特徴

演説館の建築史上の価値について見てみると、国指定文化財等データベースでは、「福沢諭吉が三田演説館の会堂として明治八年（一八七五）に建てた建築。都内に残る明治初頭の洋風建築として貴重であり、史的意義も深い」とあるだけで、建築そのものの特徴に関しては触れていない。

また、松村貞次郎編『明治の洋風建築』（近代の美術 20　至文堂　1974年）では、本文での解説はないものの外観写真の解説として「福沢諭吉が演説の場として建造したこの小品は、“擬洋風的情熱”のあまり発揮していないおとなしい作品である。新潟税関とともになまこ壁による代表例である」と述べている。ここでは、演説館の具体的な特徴として、外壁の海鼠壁を挙げつつも、全体の構成としては擬洋風建築としてはおとなしい作品としていることがわかる。

一方、昭和 51（1976）年発行の『近代建築史図集　改訂版』では、擬洋風建築の事例のひとつとして、演説館の外観写真を掲載し、また、本図集の解説書で昭和 53（1978）年発行の『近代建築史概説』では、演説館の解説として以下のように記されている。

> 弁説こそ新時代の武器であるとした福沢諭吉が東京三田の慶応義塾構内に創設した演説館（一八七五年）は、幕末の江戸市街にも盛んに用いられたナマコ壁の手法を外壁に応用した木造の建物であるが、内部は両側に幅約二メートルの二階席をめぐらし、中央部は吹き抜けになっていて、洋風のホール型をとっている
> （村松貞次郎・山口廣・山本学治編『近代建築史概説』pp. 199-200　彰国社）

これによれば、演説館の建築的特徴として、外観として幕末の江戸市街に流行していた海鼠壁を使用していること、内部空間の特徴として 2 階にギャラリーを配し、中央に吹き抜けをもつ洋風のホール型を採り入れていること（図 3）、を指摘している。まさしく演説館の擬洋風建築としての特徴を、①和風の要素として外壁の海鼠壁、②洋風の要素としてギャラ

図３　演説館内部写真（内田撮影）

リーを配した吹き抜けを持つホール型の内部空間、に見ていることがわかる。そこで、次に、この２つの要素について見てみたい。

4　演説館の２つの特徴について

4-1　海鼠壁について

4-1-1　海鼠壁の擬洋風建築の始まり

海鼠壁は、「瓦を張付け、その目地に漆喰をかまぼこ状に小高く盛った壁」[7]のことである。わが国の伝統的工法で、城郭とともに地方の中小都市の民家でも広く使われてきたもので、幕末期には江戸市街にも流行していた。この伝統的工法である海鼠壁を用いた擬洋風建築と知られるのが、明治元（1868）年の築地ホテル館である。この建物は、現在の清水建設となる二代清水喜助が、横浜居留地で建築家として活躍していたブリッジェンスの原案をもとに東京の築地に設計・施工で建てたもので、「擬洋風建築の最初期の成功例とみられている」[8]。その特徴は、その外観写真や錦

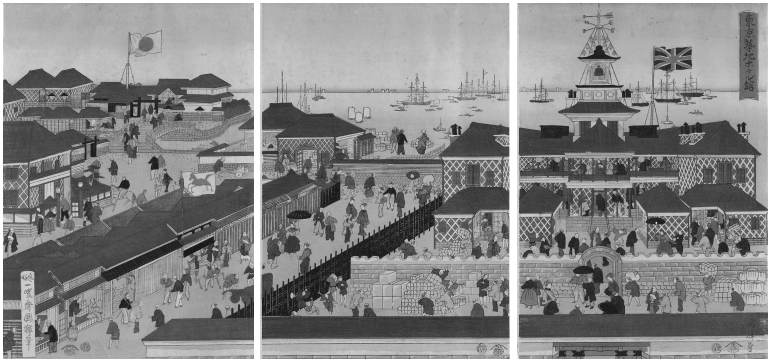

図４　築地ホテル館外観錦絵（2 代目歌川国輝作　明治 2 年　神奈川大学所蔵）

絵からもわかるように建物外壁に用いられた海鼠壁であった（図 4）。

この築地ホテル館に海鼠壁が採用された経緯については、藤森照信は、横浜で活躍したブリッジェンスの作品を通して、以下のように述べている。

> ブリッジェンスは……中略……最初の大作として知られているのは、慶応二年に高島嘉右衛門と組んで手がけたイギリス仮公使館で、外壁をすべてナマコ壁で仕上げた点が見所となっている。西洋館に日本伝統のナマコ壁を使う作りは、翌明治元年、後に述べる清水喜助と組んで完成させた東京の築地ホテル館でも採用しているから、意識的な方法だったにちがいない。
> （『日本の近代建築（上）―幕末・明治篇―』p. 51　岩波書店　1993 年）

藤森は、横浜で外国人として作品に海鼠壁を用いた最初の人物がブリッジェンスで、慶応 2（1866）年竣工のイギリス仮公使館で使用したことが紹介されている。その理由は、以下のように述べている。

> ブリッジェンスがこれに目をつけたのは、おそらく木骨石造の代用としてだったにちがいない。木骨石造とナマコ壁は、構造上、前者は石にも半分荷重を持たせ後者は瓦に荷重を期待しない差があるが、防火

> 上からみると木造の表面を石と瓦で包むことに差はない。事実、イギリス仮公使館のナマコ壁工法は、英本国には“Wood with stone”つまり“石張りの木造”と報告されているくらいである。
> （『日本の近代建築（上）―幕末・明治篇―』p. 53　岩波書店　1993年）

これによれば、英語では海鼠壁を“stone”と表現し、壁用の石材の代りとして防火上の利点もあることから用いたと考えられることが記されている。そして、また、採用の理由として「ナマコ壁の日本離れをした表現力」（p. 143）に魅力を感じていたことも指摘されている。

また、藤森は幕末期の居留地の建築を見ると、横浜以外ではほとんど海鼠壁の使用例がなく、長崎の元治元（1864）年に竣工した初代の大浦天主堂には使われていることを指摘している。そして、この大浦天主堂の設計者ヒウレ神父は横浜から長崎へ出向いて工事を進めており、大浦天主堂は横浜にみられた海鼠壁を採用したものと述べ、「ナマコ壁の採用と流布は横浜の功績」（p. 54）とし、「ナマコ壁の西洋館という存在が世に公認されたのはブリッジェンスのイギリス仮公使館のおかげで、以後、横浜では、明治の初期にかけ、ごくふつうに用いられている」（p. 54）と述べている。

このように、藤森によれば海鼠壁の洋風建築の動きは、幕末から明治初期のかけての居留地を見ると、特に最も早く開かれた横浜居留地に海鼠壁を採用した建築が存在し、その影響もあってブリッジェンスのイギリス仮公使館を皮切りに外国人の手掛けた建築にも海鼠壁の採用が見られるようになったのである。

4-1-2　幕末から明治初期の横浜居留地の建築の様子

横浜居留地が海鼠壁のルーツという藤森の解釈を当時の写真から改めて確認し、併せて、演説館の建つ東京の築地居留地の様子を概観してみたい。

横浜居留地は、安政 6（1859）年に開港され、以後、外国人が商館を構えるが、慶応 2（1866）年の大火で大半を焼失し、再び、再建された。この大火前の開港当時の様子を伝える史料としてイギリス人フェリックル・ベアトの写真が知られる。このうち、幕末期にベアトが山手からみた居留地の写真（図 5）を子細に見ると、主に屋根を寄棟桟瓦葺きとし、外壁を

図５　ベアドの写真（幕末期「フランス山からの眺め」 神奈川大学所蔵）

石積や漆喰の大壁造りの建築とともに外壁を海鼠壁とする建物なども散見できる。これから、藤森が指摘するように、幕末期の横浜居留地には、海鼠壁の建築が多数存在していたことがわかる。

ただ、初田亨も幕末期の横浜には「入母屋の寄棟などの大きな屋根や、外壁になまこ壁や大壁の漆喰塗りをもつ建築物が数多く存在していた」としつつも、慶応２（1866）年の大火を境に「和風要素を色濃くもつ町並みから純洋風の町並みへと変化した」[9]と述べている。言い換えれば、海鼠壁のような和風要素の強い建築が大火を機に消えていったという。ただ、明治 19（1886）年刊行の『日本絵入商人録』[10]を見れば、事例は少ないものの１階石造２階海鼠壁仕上げの洋館なども存在することから、明治期になっても居留地内には海鼠壁を用いた洋風建築は存在していたといえるのである（図 6）。

いずれにせよ、海鼠壁の建築は幕末から明治期にかけての洋風建築の宝庫である横浜居留地には散見されていたのであり、海鼠壁が洋風建築の重

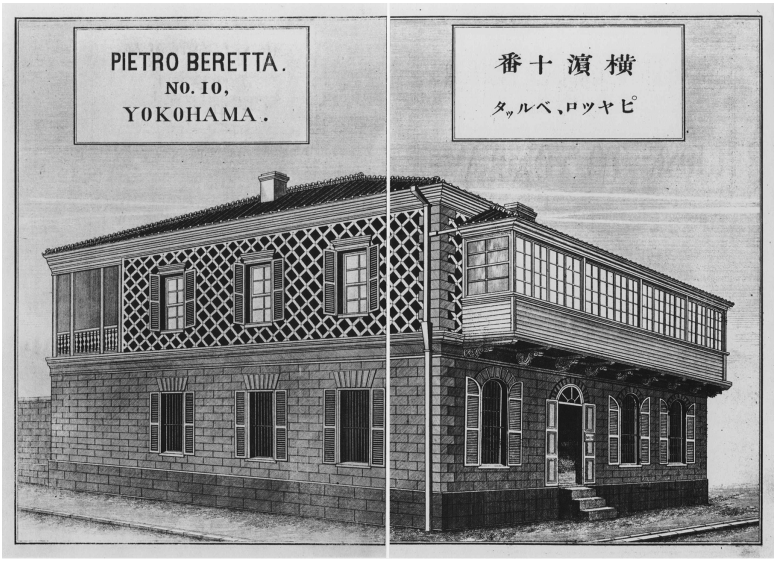

図6　横浜10番ピヤツロ・ベルッタ（神奈川県立博物館編『横浜銅版画』所収『日本絵入商人録』有隣堂　昭和57年より転載）

要なモチーフとして理解されていたことは明らかであろう。

4-1-3　幕末から明治初期の築地居留地の建築の様子

では、擬洋風建築の代表作として知られる明治元（1868）年の築地ホテル館が建設された築地居留地では、海鼠壁の建築はどのように普及していたのであろうか。ここでは、相対借り地域を含む部分を築地居留地[11]とし、その地域の建築の具体的な様子を概観するために、1870-1875年に横浜で刊行された『THE FAR EAST』[12]をもとに、築地居留地に建設された建築から海鼠壁を採用している建築を抽出してみた。それをまとめると以下のようになる。なお、『THE FAR EAST』の発行年月日は明治5（1872）年まで太陰暦で記されているため、それを（　）で併記している。

A ; THE YEDO HOTEL : 1巻6号：1870年7月20日（1870年8月16日）（図7）

B ; THE　SAIBANSHO,　YEDO : 1巻16号：1870年11月27日（1871

年 1 月 17 日）（図 8）

C ; THE IMPERIAL NAVAL COLLEGE,TSKIDJI,YEDO : 2 巻 23 号：1872 年 3 月 24 日（1872 年 5 月 1）（図 9）

D ; THE UNION CHURCH,TSKIDJI : 7 巻 1 号：1875 年 7 月 31 日（図 10）

E ; THE UNION CHURCH,TSKIDJI（B6 番館）：7 巻 1 号：1875 年 7 月 31 日（図 10）

F ; THE UNION CHURCH,TSKIDJI（A6 番館）：7 巻 1 号：1875 年 7 月 31 日（図 10）

これら以外に築地全体を撮影したものや江戸や横浜に建てられた海鼠壁の建築も紹介されているが、築地の建築と考えられる写真は 4 枚であり、同一写真から 3 棟の建物が確認できるため、建築物としては上記の 6 例が確認できることになる。

A は「THE YEDO HOTEL」と記されているが、築地ホテル館のことである。竣工は明治元（1868）年 8 月である。B は「THE SAIBANSHO, YEDO」、すなわち、江戸裁判所とあるが、築地の東京運上所のことである[13]。築地ホテル館を描いた錦絵とともに海鼠壁仕上げの建物が見られるが、これがこの東京運上所である。この東京運上所は、寄棟瓦葺きの建物で、腰壁部分に海鼠壁が見られ、築地ホテルと同じ慶応 4（1868）年に竣工した[14]。このように、築地に建てられた幕末期の大規模建築である運上所とホテルが海鼠壁の建築だったのである。

C は「THE IMPERIAL NAVAL COLLEGE,TSKIDJI, YEDO」とあり、海軍兵学寮である。竣工は、明治 4（1871）年 7 月で、設計者・施工者共に不明であるが、外壁全面に海鼠壁を採用しており、その姿は築地ホテル館とよく似ている。

D は、「THE UNION CHURCH」ユニオン・チャーチである。このユニオン・チャーチは、築地居留地 17 番に新設された建物で、竣工は明治 5（1872）年 9 月である[15]。外国人宣教師の手になる外国人向けの連合教会である。切妻瓦葺き屋根の単純な建物で、屋根には尖塔が付き、正面中央に 3 連の尖がりアーチによる入口のポーチが付いている。正面の壁は塗り壁仕上げだが、側面の壁全体が海鼠壁仕上げである。そして、この教会の右側には、2 つの建物が並んで見える。E と F であり、これらの 2 棟の建

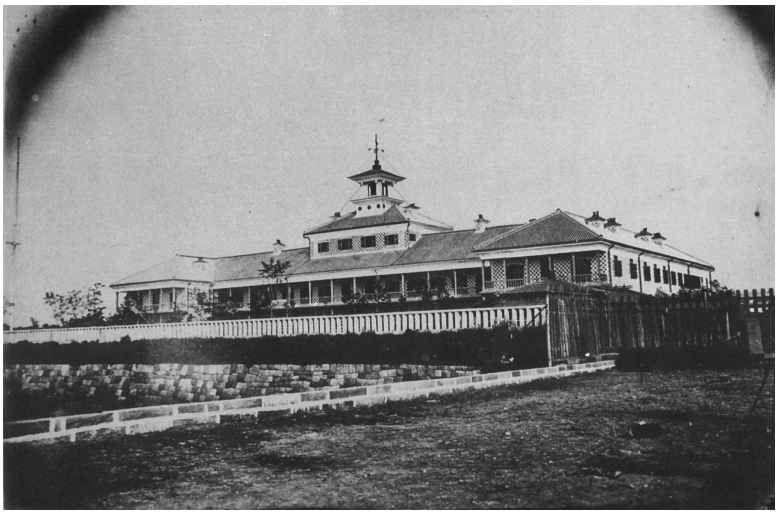

図７　THE YEDO HOTEL（『THE FAR EAST』1 巻 6 号より転載）

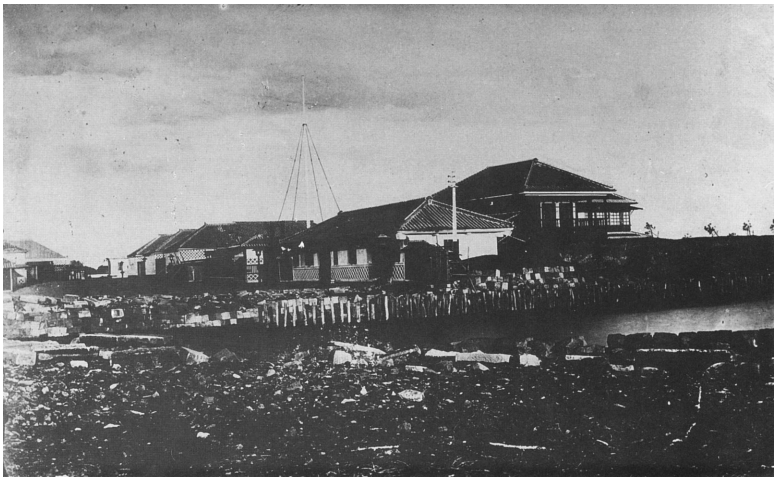

図８　THE SAIBANSHO, YEDO（『THE FAR EAST』1 巻 16 号より転載）

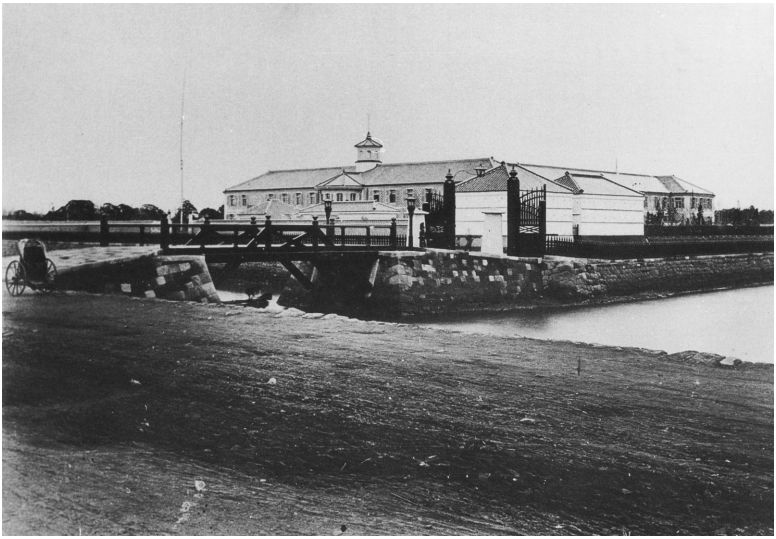

図９　THE IMPERIAL NAVAL COLLEGE,TSKIDJI,YEDO（『THE FAR EAST』2 巻 23 号より転載）

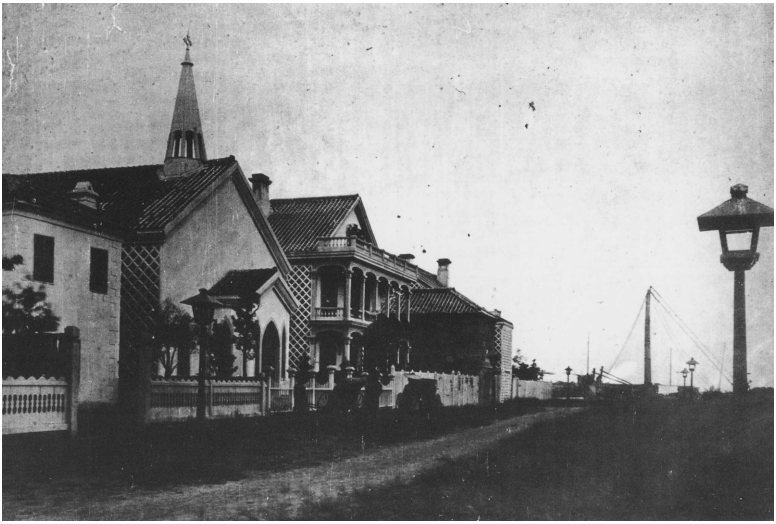

図 10　THE UNION CHURCH,TSKIDJI（『THE FAR EAST』7 巻 1 号より転載）

物も外壁に海鼠壁が確認される。これらの建物は、築地居留地 6 番地に建つことから、教会側から E が B6 番館、F が A6 番館と称されている。

明治 3 年 6 月に行われた築地居留地の第 1 回競貸で、米国長老教会宣教師のクリストファー・カロザーズとデビット・タムソンが築地居留地 6 番を共同名義で落札し、カロザーズ夫妻とタムソン用の 2 棟の宣教師館を明治 3（1870）年 10 月初め頃に完成させたという。建築工事にあたっては、建築監督としてカロザーズが任命されたという。ただ、明治 5（1872）年 4 月 3 日に銀座の大火があり、2 棟の建物は被災を免れたが、翌日カロザーズ邸のストーブパイプの過熱が原因で焼失した。そのため、カロザーズは再建に努力し、明治 6（1873）年 2 月には自宅用の A6 番館と、宣教師用 B6 館を完成させ、また、小会堂及び聖書類の補完と販売を目的に石造の倉庫をも建設したという[16]。このことから、このユニオン・チャーチと一緒の写真は、明治 6（1873）年 2 月以降のものと思われる。改めて、写真を見れば、B6 番館は、ユニオン・チャーチ同様に切妻瓦葺きの建物で、正面の 1・2 階に柱に支えられたベランダが付いている。2 階のベランダの上はバルコニーとなるなど、洋風色の強い建物である。そして、外壁は、ユニオン・チャーチと同様に正面の壁は白壁仕上げで、側面の全面が海鼠壁仕上げとなっている。その隣には石造風の建物があり、その奥に A6 番館が見える。これがカロザーズ夫妻の建物で、全体の様子は不明ながらも、壁面に海鼠壁が確認できる[17]。

このように確認できる建築事例は少ないものの、東京運上所、築地ホテル館、海軍兵学校とともにユニオン・チャーチ及び宣教師館に、海鼠壁の建築が確認できるのである。こうした海鼠壁の使用は、東京以外では、明治 2（1869）年 10 月竣工の新潟税関支署庁舎[18]や、明治 4（1871）年竣工の福井市に建設されたお雇い外国人用の 1・2 階にベランダを配したコロニアルスタイルのグリフィス邸[19]などに確認できる。こうしてみると、築地居留地とともに全国で、演説館の竣工直前まで海鼠壁の建築が建設され続けていた状況が窺え、洋風建築の要素として海鼠壁がはっきりと認識されていたことが推測されるのである。

4-1-4　福沢諭吉と築地居留地の関係性

一方、演説館を手掛けた福沢諭吉の居住地に目を向けると、築地居留地と近い場所に居を構えていたことがわかる。すなわち、『慶應義塾五十年史』によれば、以下のように記されている。

> 慶応義塾は安政 5 年の冬、即ち創立者福沢先生が年二十五歳の時、在江戸奥平藩の内命に依り、藩中の子弟を教育せんが為め、大坂より東下して、築地鉄砲洲なる同藩中屋敷附属の長屋（今の新富座の横河岸を伝つて行きたる所、即ち永代橋の下手辺ならんと云ふ）に設立したるを初とする……　（『慶應義塾五十年史』p. 29）

これによれば福沢諭吉は、安政 5（1858）年から築地鉄砲洲にあった奥平藩中屋敷に住み、そこで慶應義塾を開いていたことがわかる。そして、その後については、以下のように記されている。

> 安政 5 年以来義塾の所在地たりし築地鉄砲洲なる奥平藩邸は、条約の結果新たに外国人の居留地と為りし為め、義塾も亦永く同邸内に留まるを得ざるに就ては、予め之が用意にとて、慶応三年の冬、芝新銭座にて買入れたる地面、即ち旧有馬藩の中屋敷ありしを幸ひ、終に此地に移転することと為れり……　（『慶應義塾五十年史』pp. 38-39）

これによれば、この築地鉄砲洲には慶応 3（1867）年まで住んでいたことになる。そして、この慣れ親しんだ築地鉄砲洲が開国後の外国人居留地として使われることから、余儀なく芝の新銭座に移転したことがわかる。

ただ、こうした慶應義塾の開塾の時期の詳細は不明な部分があるようで、近年まとめられた『慶応義塾史事典』（慶応義塾史事典編集委員会　慶應義塾大学出版会株式会社　2008 年）によれば、開塾後から明治 4（1871）年の三田への移転に関しては、以下のように整理されている。

> 前期鉄砲洲時代：安政 5（1858）年から文久元（1861）年（一説には万延元[1860]年）冬まで
> 前期新銭座時代：文久元年冬から同 3 年秋まで
> 後期鉄砲洲時代：文久 3 年秋から慶応 3（1867）年末まで
> 後期新銭座時代：慶応 4 年 1 月から明治 3（1870）年末まで[20]

開塾後は、幕末の動乱期であり、そうした中で福沢率いる塾もいろいろ場所を変えていたことがわかる。それでも、このように安政 5（1858）年から慶応 3（1867）年にかけて、福沢諭吉は外国人居留地となる築地に住

み、義塾での教育に従事していたのである。明治元（1868）年に竣工した擬洋風建築で海鼠壁を用いた築地ホテル館の起工は、慶応3（1867）年7月であり、福沢諭吉が築地にいた時期は、まさに工事が始まり、その姿を現し始めていた時期であった。言い換えれば、新しい建築として海鼠壁による築地ホテル館の建設の様子や海鼠壁を用いた洋風建築の建設の様子を知ることのできる環境に居住していたのである。おそらく、こうした環境にいたことが演説館の特徴である海鼠壁の採用の背景のひとつにあったことが考えられるのである。

4-1-5　慶応義塾とクリストファー・カロザーズについて

築地居留地内に建てられた海鼠壁の建築のひとつは、居留地6番地に建つ宣教師のカロザーズ夫妻の住宅であったことは既に記した。この住宅については、『築地居留地』では、文教地区としての築地を語る中で「居留地六番地は米国宣教師カロザーズ夫妻の居宅として有名であった。この家は、原胤昭に依れば北手に張り出した小さな間口三間ばかりの一棟が英語学校でもあり教会堂でもあった」[21]と紹介している。

ところで、このカロザーズ夫妻は、福沢諭吉と深い関係を持つ人物であった。すなわち、夫人のジュリアは、一時帰国後、明治5（1872）年3月5日再び日本に帰ってくるが、帰国後の活動のひとつとして、福沢諭吉の長男と次男に、毎日1時間英語を教えていたのである[22]。一方、夫のクリストファー・カロザーズは、短期間ではあるが慶應義塾の外国人教師として雇われていた。その主目的は、英語と文学教師の仕事に加え、学科の仕組みやカリキュラムをアメリカの大学のように整理することで、カロザーズの契約期間は、明治5（1872）年6月より同年11月29日までの6か月間であった[23]。ただ、実際は、その後の明治6（1873）年7月まで慶応義塾で働いていた[24]。

また、カロザーズは牧師でもあり、キリスト教の布教も義塾で行い、その影響を受けた学生もいた。

> 外国教師カロザー氏来りて、義塾に教鞭を取るや、氏の牧師たりし為めか、一部の塾生即ち浜野定四郎、高峰秀夫、後藤牧太、朝吹英二、瀬谷鉞三郎等諸氏の如きは、多少基督教熱を催うし、日々築地に通ひて、カロザー夫妻に就き、「バイブル」の講義を聞き、讃美歌を唱ふるに至りしも、其中真実信者とも見る可かりしは、上級生兼教師たり

し瀬谷鉞三郎、高峰秀夫の両氏にして、之が反対者は門野幾之進、森下岩楠氏等なりしと云ふ。　（『慶應義塾五十年史』p. 138）

これによれば、わずか半年の在籍であったが、カロザーズの影響でキリスト教に関心を示す学生もいたようで、中には築地のカロザーズ邸まで通っていた学生もいたのである。ここに挙げられた学生のうち、浜野定四郎と朝吹英二は、草創期の三田演説会会員[25]でもあり、彼らもカロザーズと親しかった。

いずれにせよ、福沢諭吉、また、三田演説会会員たちとカロザーズは交流があり、彼らが明治 6（1873）年に完成した海鼠壁仕上げのカロザーズ邸の存在や、あるいは実際に尋ねていた可能性は極めて高いといえる。こうした演説館竣工直前の外国人の住宅の様子、即ち、海鼠壁仕上げの洋館の存在は大なり小なり、演説館の特徴である海鼠壁仕上げを導いた背景のひとつに挙げられるように思われるのである。

4-2　ギャラリーを配した吹き抜けを持つホール型の内部空間について

宮武外骨は『明治演説史』の中で、演説館について「小規模なれども西洋式に擬した我国最初の新ホールであつた」[26]と記している。この「新ホール」という表現こそ、演説館の特徴のひとつとして挙げられている総 2 階建てではなく、2 階の 3 面にギャラリーを配し、中央部を吹き抜けとした空間構成のことを意味していると考えられる。

この空間構成を生み出しているプランの形式を見ると、ギャラリーを支える柱が 4 本づつ連なり、長方形平面を幅広の中央部分と幅の狭い両側面の 3 つに分割している。こうした長方形平面を 3 つに分節した平面形式は、バシリカ式平面と呼ばれる教会堂の平面形式の基本を示すものでもあり、また、入口の反対側の奥正面には演台が設けられ、奥に行くほど緊張感が高まる空間構成は、教会堂そのものと極めてよく似ている。また、教会堂のバシリカ式には、クリアストリーと呼ばれる高窓があり、そこから室内に光が注ぎ込むような構成となっている。演説館では、側面では 2 階だけではなく 1 階部分にも窓があるが、正面の窓は 2 階部分にだけ見られるなど、高窓を意識したデザインが見て取れる。このように空間構成的には、教会堂との類似性が強く感じられるといえる。

この建築の建設にあたっては、福沢諭吉は、当時、アメリカ在住の富田鉄之助に諸種会堂に関する資料を依頼し、その送られてきた「諸種会堂の図本」をもとにしたと述べている。この「諸種会堂の図本」がどのようなものかその内容は不明であるが、演説館の外観が伝統的な土蔵造を原型にしていることを考えれば、演説館の内部空間の扱いこそ富田が送ってくれた「図本」をもとに考えられたものと推定される。ちなみに、「会堂」の意味は、「集会のために設けた建物」と「キリスト教の教会堂」という2つの意味がある。その意味で、演説館の空間構成が教会堂建築に近いものであるという解釈は十分考えられるものといえる[27]。

ただ、では演説館以前に建てられた教会堂で、演説館と同様にバルコニーを設け、中央を吹き抜けとしたものが存在したかどうかが気になる点である。ちなみに、『横浜・長崎　教会建築史紀行』（横浜都市発展記念館2004年）によれば、文久3（1863）年の横浜天主堂は、平面が演説館同様に円柱で3列のバシリカ式であるものの、バルコニーはない。同様に、元治元（1864）年竣工の横浜最初のプロテスタント教会堂であるクライスト・チャーチも3列のバシリカ式ながらも、バルコニーは見られない。また、長崎の大浦天主堂は、元治元（1864）年の創建で、明治11（1878）年に木造からレンガ造に代え、また増築も行われているが、創建時はこれまで同様に3列のバシリカ式で、バルコニーはない。このように、断定はできないものの、初期の教会堂では、平面形式はバシリカ式としつつも、ギャラリーを設けたものは確認されていない。演説館の後には、教会ではもとより、明治16（1883）年竣工の新潟県議事堂の議場のようにバルコニーを設けた建築が散見される。その意味では、管見によれば、バシ

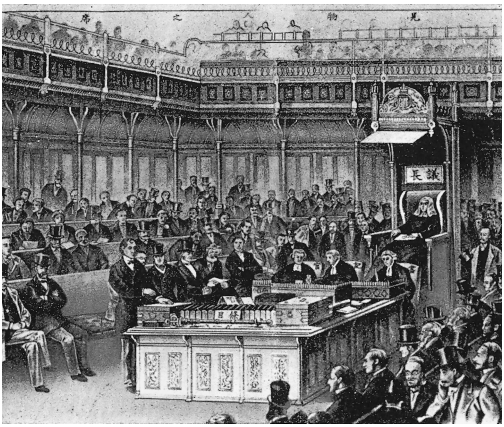

図11　「下院評議之図」（福沢諭吉『英国議事院談』より転載）

リカ式平面でバルコニーを持つ建築としては演説館が初めてのものといえるであろう。

では、福沢は、こうしたバルコニーを持つ吹き抜け空間をどこで見ていたのであろうか。福沢は幕末期から海外での見聞を広めており、そうした機会にこのような空間に出会った可能性は当然考えられる。ちなみに、福沢が発行した明治2（1869）年の『英国議事堂院談』[28]には、口絵に議事堂の内部の様子を示した図が掲載されている（図11）。ここにはまさしく吹き抜けとギャラリーのある様子が描かれているのである。演説の効果をもっとも発揮する場所の一つが議事堂であり、自らの演説館にこうした空間こそふさわしいと福沢は考えていたのかもしれないのである。

5　むすびにかえて

以上、つらつらと取り留めのない文章を書いてきた嫌いがあるが、とりあえず、この小論の内容を整理し、終わりとしたい。

演説館は、議場風の事例として重視されつつも、これまで建設経緯等の不明点が多く、近代日本建築史の中であまり取り上げられることはなかった。それでも、これまでの研究をまとめると、擬洋風建築として、演説館は、

①和風の要素として外壁の海鼠壁、

②洋風の要素としてギャラリーを配した吹き抜けを持つホール型の内部空間、の2点がとりわけ重要な特徴として位置づけられてきたといえる。

こうした特徴を踏まえ、新たに指摘できることを列記すれば、以下のようになる。

・設計は福沢諭吉と大工と考えられ、その大工は設計基準寸法として中京間である1間6尺2寸という寸法を採用していると思われ、同時に、このことから名古屋周辺の出の大工であった可能性が推測できる。

・設計にあたって、アメリカの「諸種会堂の図本」を参考としたとあるが、外観の構成は伝統的な木造2階建ての寄棟瓦葺き屋根の土蔵造を基本としており、アメリカの図書は内部空間の参考に用いたと推測できる。

・内部空間は、いわゆる 3 廊のバシリカ式の平面に 2 階部分として 3 方にバルコニー設け、内部を吹き抜けとしており、その原型は教会堂にあるものと推測できる。
・2 階にバルコニーを配し、中央部を吹き抜けとする空間構成の教会堂は、管見の限り、演説館以前にはわが国では確認できない特徴的空間であった可能性が高い。
・中央吹き抜けと 2 階のバルコニーの空間構成は、福沢がイギリスで見た英国議事堂がモデルの一つであった可能性がある。
・海鼠壁を使用した背景として、横浜居留地だけではなく築地居留地でも海鼠壁の建築が散見され、当時の流行建築であったことが推測できる。
・また、海鼠壁使用の背景として、福沢諭吉は築地に住み、海鼠壁を特徴とする築地ホテル館の工期中に築地に居たことから築地ホテル館に接する機会が頻繁にあったこと、また、慶応のお雇い外国人教師のクリストファー・カロザーズの海鼠壁を取り入れた洋館も明治 6（1873）年に築地に完成しており、福沢諭吉とともに三田演説会会員たちも交流のあったカロザーズの自邸を見たり、実際に尋ねたりしながら海鼠壁の建築の魅力を知りえた可能性が高く、そうした関係の中で海鼠壁を受け入れる素地が形成されていたと推察できる。

以上である。いずれにせよ、推測ばかりで、断定できる新しい知見はないが、演説館が擬洋風建築として貴重なことは確かであり、今後の資料の発見や調査などによりこうした推測が検討されることを願いたい。

注

1) 清水重敦『擬洋風建築　第 446 号』日本の美術 7　至文堂　2003 年
2) 『福沢諭吉書簡集』第一巻、pp. 363-364, 岩波書店。2001 年
3) 中嶋久人「三田演説館開設の歴史的意義―公共圏発展の観点から見た―」『近代日本研究』第 32 巻　2016 年 2 月。中嶋は、現在の演説館について、この小幡篤次郎の祝辞を引用しつつ、「基本的に、三田演説館の現状とそれほど変わっていない」と述べている。
4) 堀内正昭「三田演説館の建築史を紐解く」『近代日本研究』第 32 巻　2016 年 2 月
5) 『第二版　建築用語辞典』技報堂出版　1995 年
6) 宮武外骨は、「当時の『郵便報知新聞』に左の如き提灯記事がある」とし

て、この記事を紹介している（『明治演説史』p. 11　文武堂　大正 15 年）。

7）　『第二版　建築用語辞典』技報堂出版　1995 年

8）　村松貞次郎・山口廣・山本学治編『近代建築史概説』p. 198　彰国社　1978 年

9）　初田亨『明治期の都市における建築と町並みに関する歴史的研究』p. 21　私家版　1983 年

10）　神奈川県立博物館編『横浜銅版画』所収『日本絵入商人録』有隣堂　昭和 57 年

11）　築地居留地は、道路と下水を設けた更地の外国人占有のエリアとともに、「条約済国の人民商売の為、家屋を借り且其所に居住することを得」ることができる相対借り地域からなる（川崎晴朗『築地外国人居留地』雄松堂出版　2002 年）。

12）　『THE FAR EAST』は、1870 年 5 月 30 日に、絵入隔週刊新聞として横浜で創刊され、途中、月刊絵入雑誌に代わり、1875 年 8 月 31 日まで続いた。発行者は、イギリス人のジョン・レディー・ブラックであった（所三男「ジョン・レディー・ブラックと『ザ・ファー・イースト』」復刻版『ザ・ファー・イースト』付録　雄松堂出版　1999 年）

13）　川崎晴朗『築地外国人居留地』p. 14　雄松堂出版　2002 年。川崎は、この「THE SAIBANSHO, YEDO」の写真の解説として、「築地にあった東京運上所」として紹介している。

14）　築地居留地研究会『築地居留地』1 号　口絵「明治初期の明石橋と運上所」の解説に「慶応四年（一八六八）に新築された東京運上所」とあり、これから竣工が慶応 4 年であることがわかる。

15）　村上伊作「ユニオン・チャーチ・イン・ツキジ」『築地居留地』4 号　2011 年

16）　中島耕二「築地居留地と米国長老教会の初期伝道－宣教師 C・カロザースの活動」『築地居留地』1 号　2000 年

17）　川崎晴朗『築地外国人居留地』（雄松堂出版　2002 年）によれば、再建当時の A6 番館は 1872 年 11 月に完成したとし、また、その完成後の写真を掲載している。ただ、この写真では外壁は海鼠壁ではなく、「タイル張りで、白漆喰で塗られていた」と紹介している。同様に、B6 番館に関しても 1873 年 4 月完成としている。本稿では、この詳細を検討する余裕がないが、『THE FAR EAST』に掲載された写真では A6 番館、B6 番館ともに海鼠壁が確認できる。このため、本稿では、A6 番館、B6 番館、及びユニオン・チャーチはすべて銀座の大火後の竣工で、ともに海鼠壁を用いた建築とした。

18）　近藤豊『明治初期の擬洋風建築の研究』　理工学社　1999 年

19）　堀越三郎『明治初期の洋風建築』丸善株式会社　1929 年

20）　慶応義塾史事典編集員会『慶応義塾史事典』p. 4　慶應義塾大学出版会株式会社　2008 年

21）　東京都公文書館編集『築地居留地』p. 343　昭和 32 年。

22）　中島耕二「築地居留地と米国長老教会の初期伝道－宣教師 C・カロザースの活動」『築地居留地』1 号　p. 29　2000 年）

23) 『慶應義塾五十年史』pp. 122-130
24) 注 22 に同じ。p. 30
25) 松崎欣一『三田演説会と慶応義塾系演説館』pp. 40-41　慶応義塾大学出版会　1998 年
26) 武外骨『明治演説史』p. 12　文武堂　大正 15 年
27) 建築家の槇文彦も、この演説館の空間構成とプロポーションは、アメリカのコロニアル様式の教会堂を原型にしていると述べている（「建築の美」『三田評論』750 号所集）
28) 福沢諭吉『英国議事院談』尚古堂　1869 年